RA協議会第1回年次大会

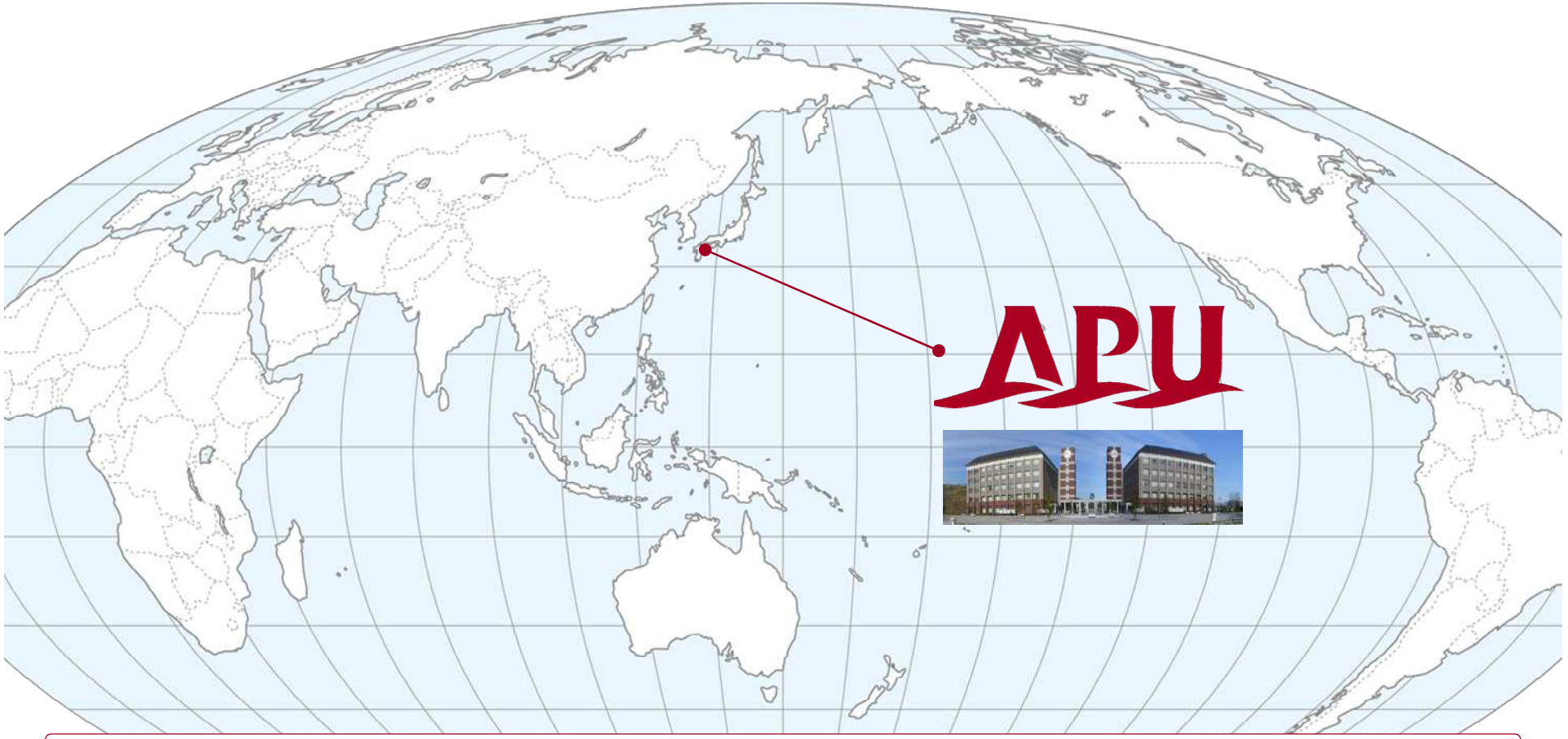
グローバル化の取組事例

2015年9月2日

立命館アジア太平洋大学 事務局次長
村田　陽一

Shape your world
APU
Ritsumeikan
Asia Pacific University

基本情報



●大学名　立命館アジア太平洋大学
Ritsumeikan Asia Pacific University
●所在地　〒874-8577　大分県別府市十文字原1－1
●開学　2000年4月
●設置者　学校法人　立命館
※大分県、別府市との公私協力による

●学生数　5，881名
（2015年5月1日、大学院生、非正規生含む）
●教員数　173名（2015年5月1日、専任のみ）
●職員数　198名（2015年5月1日、契約職員含む）

APUの理念・ミッション

自由・平和・ヒューマニズム　国際相互理解　アジア太平洋の未来創造

立命館アジア太平洋大学開学宣言

人類は有史以来、地球上のさまざまな地域において自らの文化を築き、文明の進化を求めて多様な営みを繰り広げてきた。
人類はまた、さまざまな制約と障壁を超えて、自由と平和とヒューマニズムの実現を求め、
望ましい社会のあり方を追求してきた。

20世紀は政治・経済・文化のすべての領域においてかつてない進歩と飛躍の時代であり、
人間の諸活動は地球的規模で展開されるに至った。
また、二度にわたる世界大戦の経験を通して、国際連合をはじめとする国際協力のための機関が設立され、
平和維持と国際理解に向けての取り組みが大きく前進した。

我々は、21世紀の来るべき地球社会を展望する時、
アジア太平洋地域の平和的で持続可能な発展と、人間と自然、多様な文化の共生が不可欠であると認識する。
この認識に立ち、我々は、いまここにアジア太平洋の未来創造に貢献する有為の人材の養成と新たな学問の創造のために
立命館アジア太平洋大学を設立する。

立命館アジア太平洋大学は、「自由・平和・ヒューマニズム」、「国際相互理解」、「アジア太平洋の未来創造」を基本理念として、
2000年4月1日、大分県と別府市、さらに国内外の広範な人々の協力を得て、別府市十文字原に誕生した。
世界各国・地域から未来を担う若者が集い、ともに学び、生活し、
相互の文化や習慣を理解し合い、人類共通の目標を目指す知的創造の場として、
立命館アジア太平洋大学の開学をここに宣言する。

2000年4月1日

Shape your world
APU
Ritsumeikan
Asia Pacific University

多文化共生型キャンパス

世界 **76** カ国・地域からの
国際学生2,765名と国内学生3,116名
合計5,881名が学ぶ国際大学
（2015年5月1日付／学部生、大学院生、交換留学生などの非正規生含む）

開学以来、学生が在籍したことのある国・地域 **130** 以上

正規留学生比率	96.9%
外国人留学生比率	47.0%

※2015年5月1日付
※聴講生、研究生、交換留学生含む

教員総数	173名
外国籍教員総数	86名
外国籍教員比率	49.7%

※2015年5月1日付
※総数は常勤の教授、准教授、講師の合計

Shape your world
APU
Ritsumeikan
Asia Pacific University

学部・大学院

学部

アジア太平洋学部
College of
Asia Pacific Studies
(APS)

入学定員　600名

英語・日本語を徹底的に鍛える言語教育

学部は日英二言語、大学院は英語のみで開講

約半数を占める外国籍教員から世界の「いま」を学ぶ

国際経営学部
College of
International Management
(APM)

入学定員　600名

環境・開発コース
持続可能な社会をめざして、国際開発協力のあるべき方向性を探求する

国際関係コース
アジア太平洋地域未来に向け、戦略マインドとリーダーシップを育てる

観光学コース
国際基準の「もてなしの心」を学び、観光産業を通した地域発展を考える

文化・社会・メディアコース
社会を多角的に捉え、アジア太平洋地域の諸問題の理解を深める

会計・ファイナンスコース
企業活動におけるお金の流れを把握し、資金の調達・運用知識を身につける

経営戦略と組織コース
ビジョンや行動原理の視点から、組織の持続的発展を導く経営戦略を考える

マーケティングコース
価値の高いモノやサービスを効果的な提供する方法を探る

イノベーション・経済学コース
企業発展をもたらすイノベーションと、効率のよい生産管理を学ぶ

大学院

アジア太平洋研究科　修士課程
入学定員　60名

アジア太平洋研究科　博士課程
入学定員　10名

経営管理研究科（修士）
入学定員　40名

Shape your world
APU
Ritsumeikan Asia Pacific University

国際通用性のある教育システム

学生をしっかり学ばせる教育システム

春・秋の2回入学とクオーター制の採用

●開学以来、春と秋、年2回の入学・卒業を実施
●クオーター制（1クオーター＝2カ月）とセメスター制の併用により、
　柔軟な学習スケジュールが可能
●集中的な学び（同一科目週2回）で学習の節目・山場が頻繁に

日英二言語教育 ※学部のみ

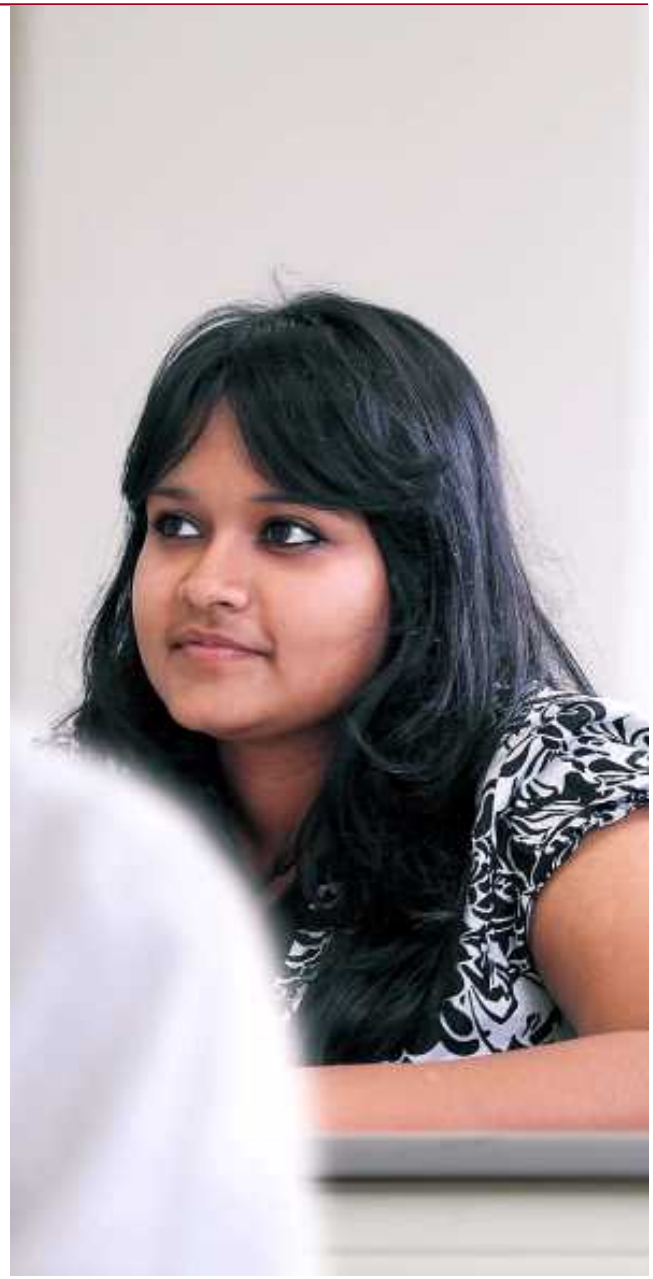
●「英語を学ぶ」から、「英語で学ぶ」へ
●習熟別クラスと少人数授業で徹底的に鍛える言語教育
●多文化キャンパスのいたるところで鍛えられる言語運用能力
●授業ではプレゼンテーションやディスカッションを多用

体系的なカリキュラムと国際基準の成績管理

●科目レベルと履修の順次性を示す科目ナンバリング
●5段階評価とGPA（Grade Point Average）による厳格な成績管理
●期末試験は成績の50％以下、日々の学習や授業参画状況も評価
●海外の大学で採用されているUMAP単位互換方式（UTCS）を採用

協働学習環境

●学生が学びあう環境、文化
●多様な学生スタッフが大学運営や教育活動に参画
●言語自主学習センター「SALC」で学生同士が教えあう
●ラーニング・コモンズで活発なグループワーク



Shape your world
APU
Ritsumeikan Asia Pacific University

国際教育寮　APハウス

違いを知る。認める。そのうえで課題についてとことん話し合い、「解決策」を導き出す力を育む

互いの生活習慣や価値観の違いを知る

- シェアルームは日本人学生と国際学生のペア
- 共同キッチンで互いの国・地域の食文化に触れる

ともに暮らすためのルールを作り、運営する

- RA（レジデント・アシスタント）が寮生を24時間サポート
- 各種イベントの企画・運営
- フロアを巡回、ゴミ分別チェック

学び合い、助け合う心を養う

- 日常生活の空間で他言語・多言語学習
- 授業やレポートの教え合い・学び合い
- 毎週フロアミーティングを実施

イベントを通じて交流を深める

- フロアや棟ごとにパーティーやイベントを開催
- 各国の文化を紹介する企画
- 日本の名所を巡るバスツアーなどを開催
- 世界祭（寮祭）の実施

個室932室＋シェアルーム378室＝1，310名　収容可能

APUの前提１

外国籍教員、
国際学生(留学生）

普通の構成員

・・・マイノリティではない

APUの前提２

対応はすべて日英

2 言語、

大学全体で

2言語対応

1 **授業**

同一科目を日本語、英語で開講

2 **会議、教授会**

資料は日英を準備、同時・逐次通訳で運営

3 **全部署窓口**

ｽﾁｭｰﾃﾞﾝﾄ、 ｱｶﾃﾞﾐｯｸ、 ｷｬﾘｱ、 ﾘｻｰﾁ、 ﾍﾙｽｸﾘﾆｯｸ、 ﾗｲﾌﾞﾗﾘｰ etc.

2言語対応

4 **学内資料**

願書、学生・教職員ハンド、オリエン他

5 **システム環境**

Web、履修登録、PC、成績照会他

6 **学生イベント**

学園祭など学生企画も司会は2言語

研究支援１：２言語対応

- 学内助成募集要項
- 科研費説明会
- 学内セミナー
- 研究助成アドバイス
- 応募手続き説明会
- 申請書点検
- 電子申請ｼｽﾃﾑﾏﾆｭｱﾙ
- 電子申請ｼｽﾃﾑ入力
- 科研費結果通知
- 交付申請手続き
- 執行説明会
- 執行ハンドブック
- 執行に関わる書式
- 研究費執行相談
- 外部資金情報提供
- 内部監査対応

etc.

学内で英訳、できるだけ日英同じ情報量となることを目指す

研究支援２：人的な体制

1. **専任職員**
   全オフィスで英語対応実施

2. **ネイティブ職員配置**
   原則すべてのオフィスに配属。研究部所属者は翻訳・通訳、教員対応を主に担当

3. **庶務担当者**
   通常一般事務契約職員が外国籍教員の研究費執行を担当
   必要に応じて通訳のネイティブ職員と2人で対応

難しさ１：科研費、研究費執行

1 **What is *kakenhi*?**

外国籍教員は「科研費とは？」の説明会から必要。
科研費が日本で研究を行う上で重要であることを理解してもらう

2 **研究費執行ルール**

すべて紙の証憑が要求されることについて仕方ないこと、とならない。
ペーパーレスにして効率化するよう事務局に対し要求される。

難しさ２：科研費

3

外国人研究者は不利？

科研費は日本政府のファンドなので外国人には不利ではないか、と思われている

4

英語の申請は不利？

日本語でないと不利だという思い込みがある

難しさ３：人・組織

1. **専任職員**
   ３～５年で異動
2. **事務契約職員**
   有期雇用
3. **ネイティブ職員**
   有期雇用、地方都市にリクルートする難しさ

難しさ４：システム

4 **日本語が基準**

日本語を英語に翻訳する

5 **英語文書の違和感**

日本語で考えられたものを英語に翻訳するため、英語で読むと違和感が生じることがある

6 **平等か効率化か**

説明会等、逐次通訳で実施するが、時間が2倍かかる。
言語ごとに会場を分けると効率的だが情報に差が出る可能性が

グローバル化

APUの課題

課題１：研究支援高度化

1 **教育だけでなく研究も**

教育重視から研究も重視へ。また研究アウトプットの可視化を。

2 **高度専門職員の配置**

RAによる研究支援の高度化、安定化の検討

課題２：コミュニティ

1 **学内教員間**

言語を越えたコミュニケーションを促進する

2 **APU Night**

APU的議題を考えながら教職員が職種や言語を超えて交流する自主的な取り組みが行われている。組織的な取り組みも含め、交流の更なる活性化が必要

多様な言語、職種を包含するコミュニティをいかに醸成するのか

心がけていること

1 **言語化する**

「わかってくれるだろう」という思い込みを手放す

2 **衝突に向かい合う**

正面から話し合う

3 **想像力を持つ**

経験値の蓄積が多文化・多言語への対応力を養う

大学のグローバル化の取組
（OISTの事例）

信州大学　長野キャンパス RMAN-J　1st-2015 / Sept 2nd 2015
岡田　吉央　沖縄科学技術大学院大学　外部研究資金課

Yoshio OKADA, PhD Okinawa Institute of Science and Technology
Grants and Research Collaborations Section

OIST

OKINAWA INSTITUTE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY GRADUATE UNIVERSITY

OIST OKINAWA INSTITUTE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY GRADUATE UNIVERSITY | 1

沖縄本島の西海岸の高台の森の中のキャンパスが出来て最初の学生が3年前。

世界で選ばれる大学になる。

OIST Academic and Research Fields
OISTの教育研究分野

「沖縄科学技術大学院大学（OIST）は、21世紀初頭から、グローバルに伸びゆく知識基盤経済、および連携しあう世界の目的に適うよう、これまでとは異なる種類の機関として設立されました。」

チャールズ・ベスト博士*　OIST創立式典基調講演より
*マサチューセッツ工科大学（MIT）名誉学長

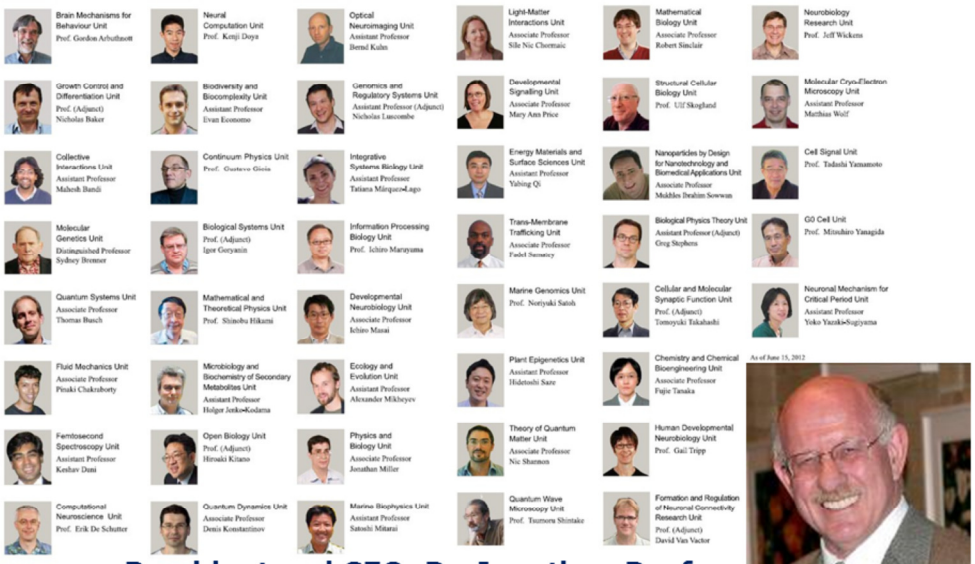
International: Excellent Mix of Disciplines: Good Age Distribution

国際的かつ研究分野・年齢構成のバランスが取れた教授陣

外国人率68%

Faculty

教員



President and CEO: Dr. Jonathan Dorfan

Supports for Students
学生のための経済支援

- **全ての学生がOISTからの経済支援を受けることができます。**
- **キャンパス内の居住施設へ入居することが可能です。**

  - **経済支援**
    年間授業料：540,000円
    授業料差引後実質支給額：年間2,400,000円
    （リサーチアシスタントシップとして支給）
  - **キャンパス内居住施設への入居**（学生レートの適用）
  - **学会参加等の旅費をサポート**
  - **PC支給**

学生への経済支援は日本の中では特殊な条件で、贅沢な条件のようにも見えるかもしれませんが、「世界で選ばれる大学」というのの基礎的な条件の整備に過ぎないと見るべきと思います。

外国人研究者に

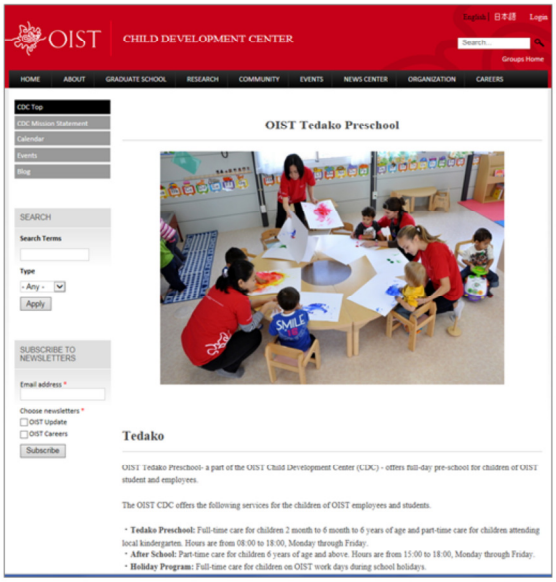
“ここで研究を続けたい”

と思わせる環境

たぶんそれは、日本人研究者も

“ここで研究を続けたい”と思える環境

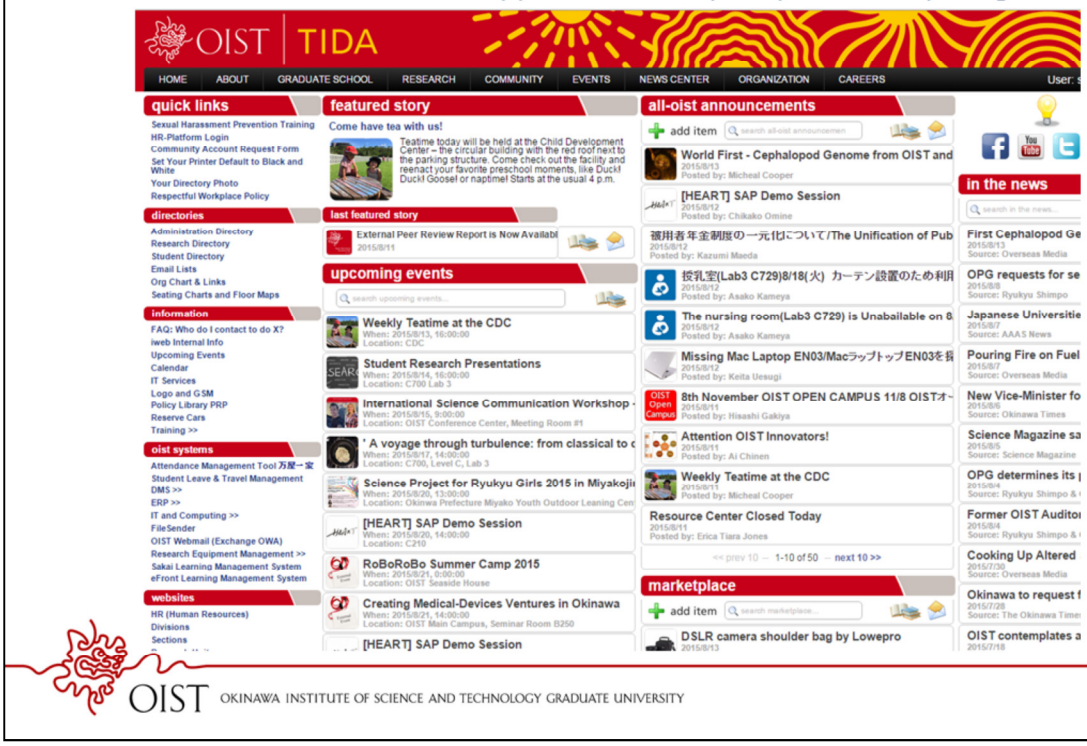
Supports for Everyday Life
生活支援



大学のGlobal化を実現する為には、生活上の支援も欠かすことは出来ません。中でも必須のものとして研究者の子供たちの教育環境の整備です。OISTではキャンパス内に保育園を整備して、合わせていわゆる学童保育のサービスなども提供しています。色々な国からの子供たちですが、言語としては日本語と英語の2言語でして居ます。

Supports for Research
研究支援

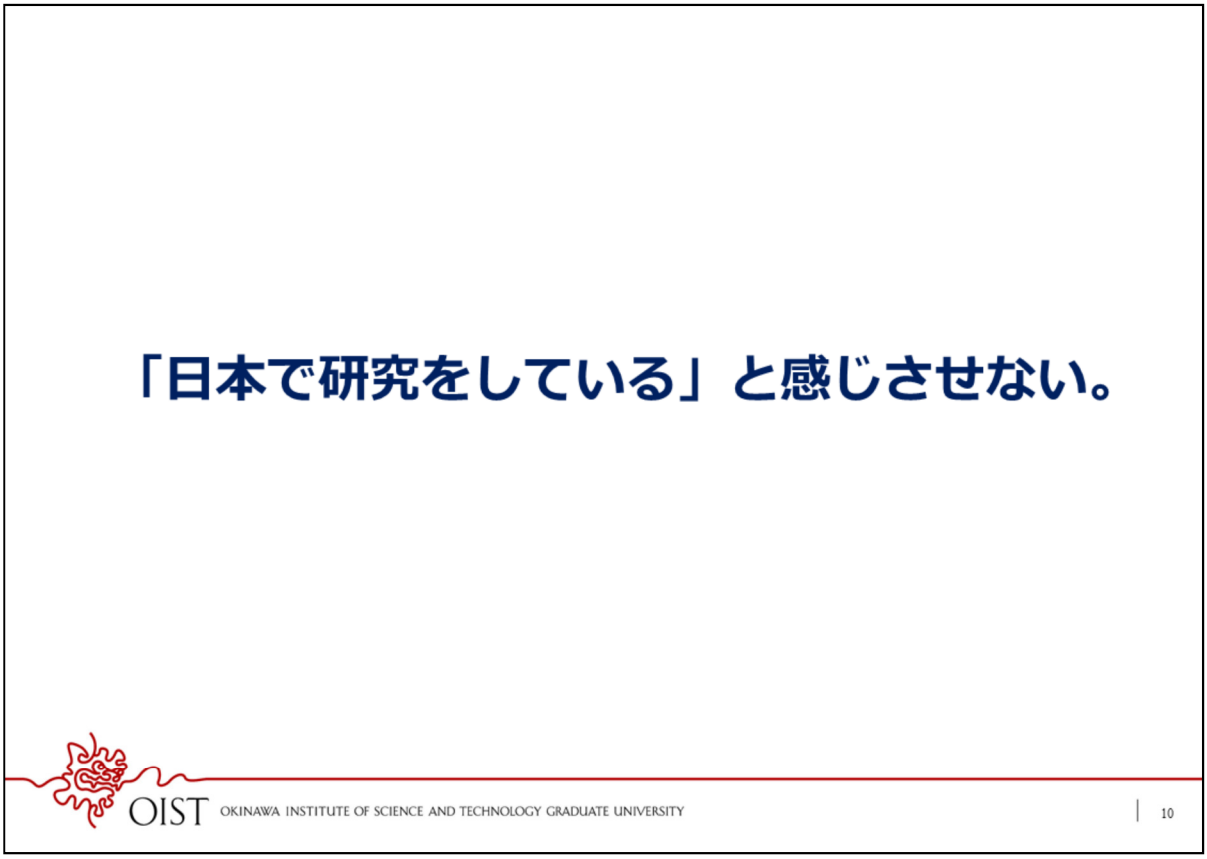
*Supports for everybody and everything in one page



何処から沖縄に来てもひとまず困らない。生活情報、社会の情報、学内イベント、事務手続き、クラブ活動、etc

生活支援と研究支援は切り離す事は出来ない。それをワンストップサービスで実現しているのがTIDAという名の学内web サービス。

一番左から大学のルールや手続き、右に行くと学内のイベントの告知欄、各種のクラブ活動のお知らせや、家具や子供のおもちゃのリサイクル情報、一番右には地元の新聞の翻訳したニュースまで。これは外国人のみならず国内でも沖縄外から来た人にとってはとても有用な情報源であり、また情報発信の場にも成っています。本当にワンストップサービスに成って居るというのが大事です。これは基本的には英語で出来ていますが、多くの情報は日本語も併記の2言語に成っています。



Academicな周りの環境も変わる必要がある。

OISTでは生活と研究の支援環境を整えて、「日本で研究をしている」ということを感じさせない、デメリット、ディスアドバンテージを感じさせないという事が実現出来ているのだと思います。

外国人率68%, Happy率96%(？)

外国人教員比率　Percentage of non-Japanese professors at OIST and other Japanese universities

	National	Public	Private	Total	OIST
Number of Full-time Professors	63,218	12,871	102,580	178,669	45
Number of Foreign Professors	2,147	492	4,436	7,075	31
Percentage	3.4%	3.8%	4.3%	4.0%	**68.9%**

外国人大学院生比率　Percentage of foreign graduate students at OIST and other Japanese universities

	National	Public	Private	Total	OIST
Number of Graduate Students	152,338	16,161	86,887	255,386	33
Number of Foreign Students	25,549	1,842	14,430	41,821	28
Percentage	16.8%	11.4%	16.6%	16.4%	**84.8%**

OISTは教官が68.9%が外国人、大学院学生は84.8%が外国人。

もう一つここで注目したいのは、全国の大学で結構な数の外国人大学院生はもちろんの事、外国人の教員も居るということ。4%ですから、日本人が96%という事になりますが、日本のアカデミックな環境について4%の外国人がどう考えているか、どう扱われているかを考える事は大事です。

68%は高い数字だが、では4%は低い数字か？というとそうではない。

なのになぜ学内情報の発信は言語上のdiversityが求められないのか？

外国から来た研究者にはどう見えるのか、紹介。応用物理学会誌の記事から

これらのコメントの中には必ずしも一般化して言う事の出来る客観的な事実ではないと考えられる事も含まれて居ますが、少なくとも希望を持ってやって来た人に「そう思わせている」という残念な状況であるという事は心に留める必要があると思います。

日本人と外国人の公的助成金獲得者の比較

KAKENHI high-end FY2012

Funding Categories	New/Continued	# NON Japanese Awardees	# Total Awardees
Young Scientist S	New	0	47
Scientific Res. S	Continued	0	340
	New	0	87
Innovative Areas	Continued	0	98
	New	0	21
Special Promoted	Continued	0	57
	New	0	18

OKINAWA INSTITUTE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY GRADUATE UNIVERSITY | 13

これでは外国人は日本にきて研究しようと思わない。

日本人と外国人の公的助成金獲得者の比較をしてみるともっと衝撃的です。

科研費の金額が多い方の上位のリストから見て作成した表です。2012年の場合ですが若手のSとか基盤のS、新学術領域、特別推進研究の新規と継続の全採択件数とその内の外国人の件数の表ですが全てZERO。

これでは世界で選ばれる研究環境とは言い難いです。外国人研究者に”ここで研究を続けたい“と思わせる環境とも言い難いでしょう。

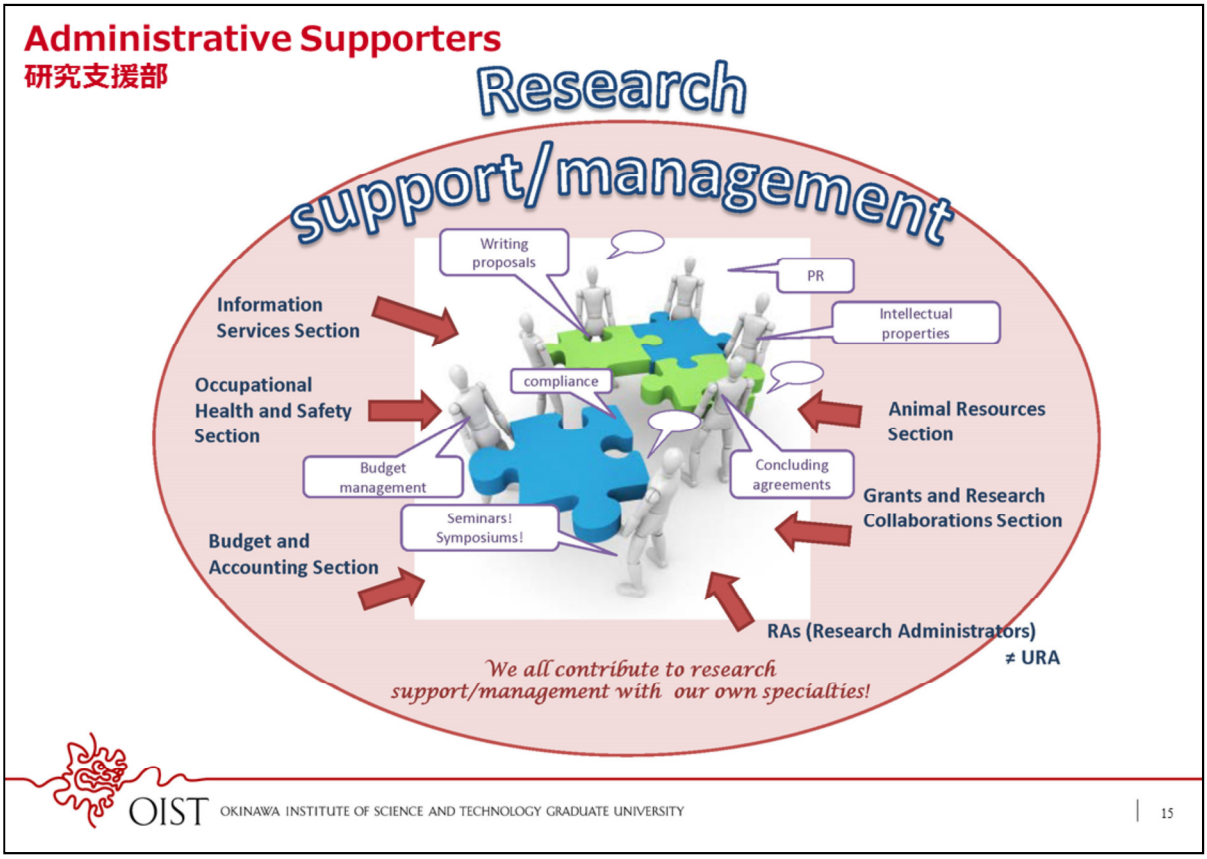
~~外国人研究者に~~

“ここで研究を続けたい”

と思わせる環境

OIST OKINAWA INSTITUTE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY GRADUATE UNIVERSITY | 14

ということで、問題は外国人でも日本人でも”ここで研究を続けたい“と思わせる環境をどう整えるかという事。

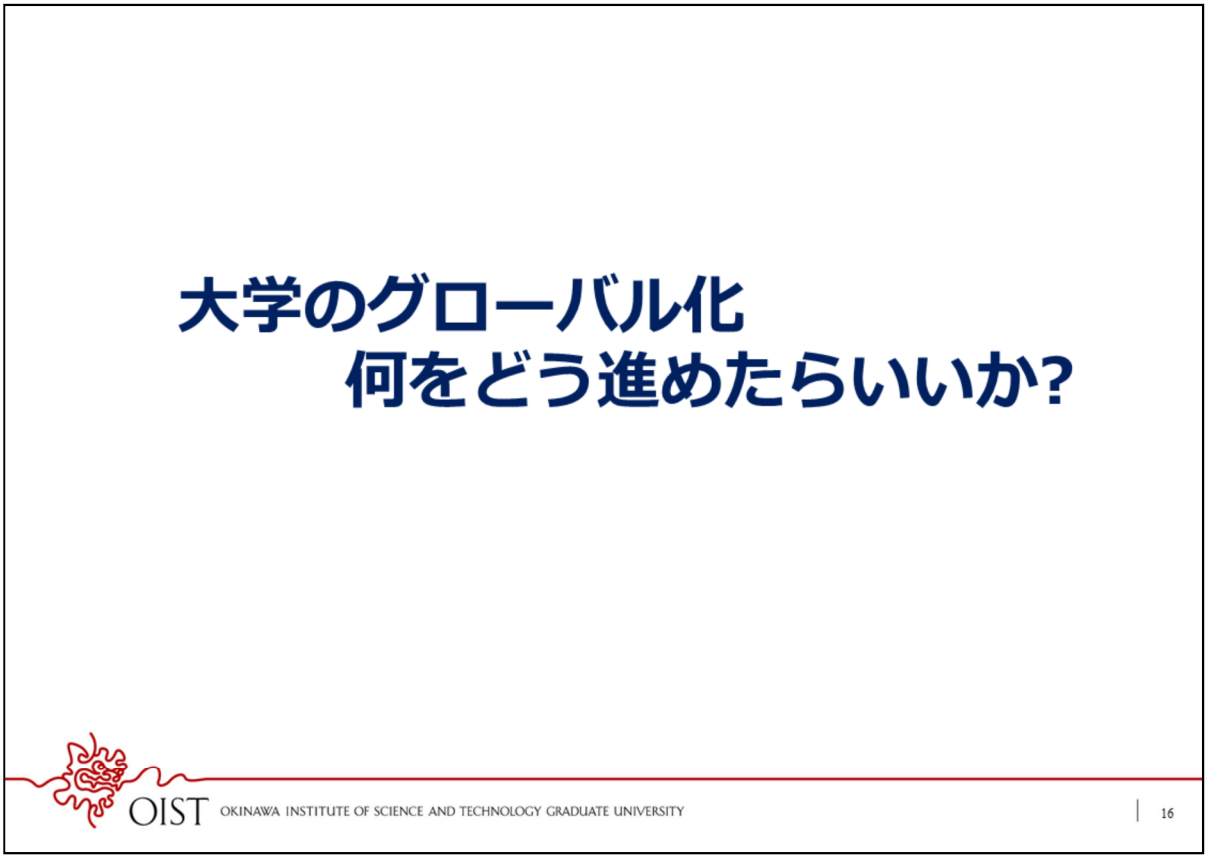


研究支援部やその他のすべての事務部門は研究の支援のためにある。

OISTでの研究支援の体制を絵にしました。

OISTには部局というのは無いですが、事務は幾つかの組織に分かれています。そのうちの一つが研究支援部。研究支援部の中にはインフォメーションサービス、動物実験支援、グラントと共同研究支援の外部研究資金課などがあってそれぞれの専門的な研究支援をしていますが、研究支援部だけではなくて予算や会計課、調達課、広報、産学連携支援などもすべて研究支援のために仕事をしています。また、各研究室にはOISTではResearch Administratorとよばれている研究室の研究プロジェクトの管理をしている事務スタッフも居ます。このRA協議会で言うURAとは少し違うとも言えますが、かなり重なっているとも言えると思います。われわれの外部研究資金課のスタッフもURAという言葉を使っていたりもしますが、組織としてはURAというのは存在していません。むしろ学内の事務の色々なところでURAの機能を果たしている人たちが広く分布して居ると考えた方が当たって居ると思います。

大学のグローバル化の担い手という事で言っても、事務部門の全部がこれは各研究室のResearch Administratorも含めてですが全員が担い手となっています。逆に言えば、そうでないと大学のグローバル化は実現しないと思います。



日本の大学はガラパゴズ化しないようにするためには外ときちんと繋がって人も物も情報も流入も流出もして、入ってきたものもきちんと育つようにして、という環境を作らないといけない。日本の、世界からの研究者による世界のための科学研究とならないといけない。

Academicな周りの環境も変わる必要がある。Academic Kingdom＝これまでの大学の慣習、研究環境／学術分野の風潮

Academic Kingdomともいうべきこれまでの日本の学術・研究に従事する者のマインドセットの転換、引いては日本の科学技術政策までも大きく変えていくことも視野に入れ、各大学のグローバル化への取り組みを推し進めていかなければならない。

各大学の内側での小さな努力の積み重ねと、それぞれが連携して研究環境全体を変えていこうという外側に向けた働きかけの両輪を回し続けていくことこそが重要である。

非日本人の研究者がminorityではいけない。
差別的でない扱いをしなければいけない。

OIST OKINAWA INSTITUTE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY GRADUATE UNIVERSITY | 18

大事なメンバーなら環境を整えよう。語学の環境は克服は極めて容易な第一歩に過ぎない。

機会均等は保障されていなければいけない。今は96%が日本人の教職員ですが、その96%だけが満足でいいのか？「大事な構成員とは考えていないのではないのか」ということが問われていると思います。これは清水寺のおみくじの自動販売機ですけど、英語もハングルも中国語も具えられていました。清水寺も機会均等を達成しているのに大学ではそれが出来ないという事はちょっと無い。

「変われるかニッポン？変革を迫られる大学・教育機関」というような課題認識。こういう課題認識はOISTのいろんな部署が共有している。これはOISTがネイチャー及びソニーコンピューターサイエンス研究所と共催したサイエンスカフェのポスターで、この場合は学務課が学生募集の為の広報の一貫としてしたものですがAcademicな周りの環境も色んな物が変わる必要がある。だからこんな形で発信をしているという事だろう。それはつまり「今までのあり方を変え」て、「壁を越え」なければいけない。回りも変わらなければ成功はしない。

そう考える人が多数派に成らないと日本の大学のグローバル化は実現しない。